第77回麻布獣医学会　一般講演 11

動物実験議論の現代論理学による整理
—対立する議論の整理—

渋谷　絵里，白石　明彦，杉山　晃一，菅生　晃子
太岐口　愛，吉水　郁美，黒木　秀親，小田倉 正圀

麻布大学環境保健学部環境政策学科情報環境

近年は動物愛護や動物実験の是非をめぐる議論が活溌となり，過激な動物愛護論者は牛や豚を食べることにも反対し，人類は菜食に徹するべきだと主張する。「動物の権利」をどこまで認めるべきかの理想が異常に高すぎるのである。動物の権利を人間と同等に認めるべきだとの認識で，人が人間を食べてはいけないのと同じく，人が動物を食べることも禁止されるべきだと主張しているのである。

いずれにしろ，動物愛護について議論するときには感情論を総て排除し，冷静に論理的な議論を進めなければならない。感情論や我田引水論では本質的な解決が得られないのは当然である。

本報告では動物愛護のうち動物実験に限り，それも日本国内で動物実験をする場合に限定し，演者らが展開している論理研究の一部を報告する。現代論理学による演算は演者らの手によるもので総て独創である。

対立する議論（帰結の異なる論証形式）では両者の意見を併記して処理する場合（両論併記）もあるが，本質的な解決は得られないことが多い。

そのものが実験動物なら（P）実験をしてよい（Q）〔実験容認論〕，そのものが実験動物なら実験をしてはならない（¬ Q）〔実験否定論〕

$P \Rightarrow Q,\ P \Rightarrow \neg Q \vdash \neg P$

両論併記で得られる妥当な帰結は「故に，そのものは実験動物ではない」となり，議論の本質から外れてしまう。

□対立する議論を整理する原則

◎論理演算に登場するそれぞれの要素（文記号）の集合は等しくなければならない。

「現代の蛮行」とか「非科学的な偏見」などは実験否定論にのみ登場し，「実験動物の貢献」とか「動物実験が重要不可欠」などは実験容認論にのみ登場する。この文記号の食い違いを残したまま論理演算を進めても両者が納得する妥当な帰結は得られにくい。

◎法律議論ではなく倫理議論である。

日本の法律では動物を「物」として扱うので動物実験が法律に触れることは先ず無く，どちらが法的に正しい（妥当）かの議論は意味を持たない。動物の権利と社会が要求する動物実験との関係を，倫理としてどのように整理するかが最も重要な点である。